

# 特別合同授業の展開と成果

山 本 吉 次

## 1. はじめに

特別合同授業は、各界で活躍中の方々を講師としてお招きし、全校生徒を対象として御講演を頂戴するという企画である。昭和46年度より始まり、本年度で21年目を迎える。平成4年度末で、御来校いただいた講師の先生は85名にもものぼる。本報告では、あらためてこの企画の二十年間にわたる変遷と現状を紹介するとともに、現三年生および卒業生に対するアンケート調査により問題点を探り、その成果も明らかにしていきたい。

## 2. 特別合同授業の開始

特別合同授業の開催については、昭和46年7月の教官会議で承認可決された。その時に確認された「目的」「方法」「趣旨」は、『金沢大学教育学部附属高等学校 特別合同授業の記録 第1集』（1972年）に詳しく掲載されている。少し長くなるが、ここに確認のためにあらためて掲載したい。

### 経 過

昭和四十六年七月、教官会議で、「特別合同授業計画案」が情報文化部より提出され、協議の上承認可決された。その時の記録は次のようである。

- 目的 一、教科書教材の拡大と深まりのために  
二、教科間の間隙を埋めるために  
三、高校教育と大学教育の接点として  
四、大学進学への指導教育と専門的学界水準の紹介  
五、従来の講演会のおさなりの在り方の反省
- 方法 一、講師 主として大学関係者  
二、a講演会形式 b討論会形式（テキスト使用 生徒質問団 事前事後学習）  
三、全学年対象 体育館にて二時限（100分）使用 年間5～6回  
四、内容 年間テーマを用意し、各分野にふれ得る様配慮する。（東洋と西洋 生命等）  
五、費用 一回約四万円 生徒一人あたり月額50円×10回×400人=20万円  
（47年度より文化教室費と合わせ月額100円×10回×400人=40万円）  
六、1、2、3年の学力差は講師と話し合いの上、関係ないように配慮する。  
七、授業時は、教科内とし、各科の分担放出の考えをとる。

### 趣 旨

現今の高校教育は、教育的にも、学術的にも、社会的にも、あまりに多岐にわたる要望を担って展開されている。そして、それらに応えるためには、まだまだ克服しなければならない諸種の障害が横たわっている。その反省と、生徒たちのよりよき未来のために、一つの試みとしてこの特別合同授業を計画したものである。

目的一の「教科書教材の拡大と深化」というのは、現在の高校における各科教材は、それ

その専門分野を追求してはいるが時間的制約、教材それ自身の制約のために、必ずしも十分な成果を得ることができないと考えられる。特に大学受験という目的のためについやさざるを得ない方向があり、一方では皮相的概念的な部分があったり、また一方では部分的追求のあまり閉鎖的な取り扱いがあったりする。もちろんこれは、教師の努力により解消され得るものではあるが機械的な記憶中心の方向はまぬがれ得ない。

目的二の「教科間の間隙を埋めるために」というのは、各分野の研究が持つ中広い立脚点や関連性を知るためである。総合的巨視的な問題意識も、こうした教科間の壁を取り除き、立体的有機的な学習に根ざすものであることを知るためであるが、高校教育としては当然のことである。

目的三の「高校教育と大学教育の接点として」という点は、現状の反省点からである。高校と大学が入試でしか結ばれていないとするのは、極論ではあるが、しかしまた一面では事実でもあり得る。高校教育が本来志向しているものや、専門教育の準備段階としてのより基礎的思考の必要性を認識することが大切である。

目的四は、本来的な進学指導の在り方の一つとして考えた。専門的学問分野の内容の一端を知り、研究に対する感激や発憤を期待したい。同時に、専門研究者の豊かな人格や人生体験にふれ、自分の将来を見つめる資になるであろう。

なお、この授業は育鳳会々員（生徒父母）にも公開して、家庭との関連も扱っている。

#### 実施方法

- 一、講師 講師は大学関係者としたのは、目的三、四項によるが、必ずしもこれに限ったのではなく、一般関係者や、また生徒父母の中からも講師を考えている。
- 二、方法 テキスト使用というのが、従来の講演会と異なる点である。各講師より事前に指示を頂き、これをプリントして全校生徒に配布、事前学習とする。
- 三、対象 全学年対象である。学年毎にという案が提出されたのは、学力差による理解度の問題であったが、考えてみれば、これは単なる物理的な会場問題に過ぎず、内容的には必ずしも学年別にしなければならない理由も見つからない。
- 四、テーマ 講演内容や、どのような講師を招くかは、きわめて重要な問題である。初期に考えていたテーマ案について記述しておく。

世界の中の日本（神話、思想と美術、制度と文化、西欧と科学）

ユートピアの思想（歴史、地域、思想、宗教各分野より）

危機の意識

負の思想（マイナスの意味、数学的意味、アウトサイダー、隠者思想、ニヒリズム）

海と人間（海の発生、生命の発生、海の思想、地図の思想、ノルマン征服、大航海時代  
海の利用、海洋資源、海洋汚染）

宇宙と人間（宇宙の科学、星の思想、空の征服、月の美意識、宇宙開発）

価値の思想（美の価値、法の価値、金の価値、大地の価値）

集団の思想（血、族、国家、部落、動物社会）

以上はいずれも思いつき程度であり、高校においてどれほどの必要性和妥当性があるのかの検討はまだない。こうした年間テーマが実現するために、どのような方法をとれば、専門の講師が招けるかも手さぐりである。

結局この合同授業は、テーマによる開講ではなく、人による開講が現状である。今後改良しなければならない点として残されている問題である。

五、費用 受益者負担という形をとった。一人年間1000円を分割納入し、この金額の中で運営することにした。その内約400円は石川県高文連文化教室の演劇音楽鑑賞の負担金となるため、600円×400名で、年間予算は約24万円である。

六、どの時間を使用するかということも重要な問題であった。はじめは内容が各教科にわたるものであるから、各教科の時間を適時使用するものとして、授業時いつでも開講できることをたてまえとした。それは、講師の日程の都合によるものだから、自由に時間を移動できるようにしなければならなかった。

来年度からは、チーム活動の時間をこれに当てることができると思われる。

実施記録（略）

特別合同授業の企画に当初から携わっていた本校松田章一教官によれば、当初は、従来の講演会（特別合同授業以前の講演会の一覧は資料①）に対する反省から始まったようである。特に、従来の講演会を変更した点は、テキストの使用と事前の指導であった。授業という性格を前面に押し出したのである。そのために名称も「特別合同授業」としたそうである。

一方、趣旨にうたわれている「現今の高校教育は、教育的にも、学術的にも、社会的にも、あまりに多岐にわたる要望を担って展開されている」状況は今も変わりが無い。それどころか、相互に依存しなければ互いに存在できない新しい国際化の時代の中で、また、地球規模の視野で考えなければ解決できない問題を多く抱えるようになった今、なお一層である。広い視野をもたせ柔軟な思考力を養い、さらには実際に行動のできる人間の育成が要請されているのである。目的で訴えられている点に関する必要性も今も変わっていない。大学受験のための教育の皮相化、教科間の隔絶は、当時より一層進行しているかもしれない。進路指導の在り方も、この時以上に偏差値が幅をきかせ、大学でどのような研究がなされているのかも知らず、自己がどのような学問を学ぶために大学に行くのかも考えずに進学しているものが多くいる。

このような、今でも十分通用する理念と目的で始まった本校の特別合同授業は、現実にはどのように展開されたのか。次節で整理してみたい。

### 3. 特別合同授業の展開

#### (1) 講師

特別合同授業で平成4年度までにお招きできた講師は85名である。（講師一覧は資料②を参照）当初の予定では、年間5～6人であったが、実際には平均すると4名ずつになる。分野別に整理すると次のようになる。

文学・言語学関係26人	芸術・文化関係17人	物理学・工学関係9人	
医学関係8人	国際関係・政治関係6人	歴史学・考古学関係4人	
経済関係4人	数学関係4人	社会学関係2人	心理学関係2人
生物学関係1人	地学関係1人	宗教関係1人	環境学関係1人
登山家1人			

講師を分野別に眺めてみると、かなり広い分野にわたっており、一応所期の目的を達する配分となっている。しかし、その中にもいくつかの特徴と若干の問題点がある。

第一は、文学・言語学関係の講師が全体の中で非常に多いということである。これは、特別合同授業の企画を担当した教官が、国語の教官であった時期が最も長かったことにもよると考

えられる。担当者によって偏りができるというのも一つの問題点である。

次に、医学関係が特殊な分野でありながら全体の中で割合が多いという点の特徴である。本校の生徒が医学部進学志望者が非常に多いということに起因するのであろう。本年度も生徒の希望から、ターミナルケアの専門医であるJR東海病院長黒柳弥寿雄氏をお招きした。本来的な進学指導を行なうという目的から考えると、これは当を得たことであろう。しかし、文科系志望者と理科系志望者の比率がほぼ五対九である本校生徒の志望動向から考えると理科系が少ないようである。私もこの企画を担当している間、なんとかこれに対応しようとした。しかし、理科系の学問の場合、どうしても高校段階と大学段階あるいは学問段階の差が著しく、生徒諸君にはわかりにくい授業になることが多いようである。

その時期その時期の最先端の講師を呼べたのは評価できる点であろう。最近では、新しい学問の世界を開拓している上野千鶴子氏、地球規模で深刻になっている環境問題に関して宮本憲一氏、フラクタルという新しい数学に挑戦している宇敷重広氏などである。また、大江健三郎氏をはじめとして、いわゆる大家といわれるかたも多く御来校いただけた。また、若手として現場で活躍中のかたも何人かお話をうかがえた。さらに、登山家の八木原罔明氏やハーピストの池田千鶴子氏のように従来にはなかったジャンルのかたも最近ではお呼びできている。ただ、一つだけジャンルとして欠けているものがある。それはスポーツである。機会があれば、ぜひお呼びしたい。

次に、講師を所属別に分類してみる。

大学人・研究機関関係44人 芸術家・作家13人 評論家8人  
企業人4人 ジャーナリズム・マスコミ関係4人 役人2人 その他10人

やはり、大学・研究機関関係が最も多い。それは当初の「趣旨」にもよる。しかし、「趣旨」でも明らかにしていたが、実社会で活躍されている方、あるいは先に紹介した登山などの特殊な世界で活動している方もお招きしている。この点に関してはアンケート調査の考察の中でもう一度触れたい。

## (2)方法

基本的に講演形式である。講演時間は90分の予定で行なっている。うち10分程度、質問時間を設けているが、超過することが一般的である。時間は、各教科からの拠出という形で頂戴している。全学年約420名を対象に2時間連続で時間を取っている。父母にも事前に連絡しているので、通例、若干名聴講されている。時期は、会場が体育館であることもあって、寒冷な冬期間には行なわず、基本的に一学期2回、二学期2回開催している。

当初、討論会形式も考えていたが、ここ10年間は、その形式はほとんど行なっていない。というのは、講師の方々が忙しくてその時間が取れないからである。講師の了承で、講演後有志と講師が討論会的なことが行なえたのは、10年間で高野悦子氏の場合だけである。ただし、講師には、講演後時間の許すかぎり、控え室である校長室で有志の質問に応じていただいている。

当初の計画で、従来の講演会と違って特別合同授業と称した理由の一つが、事前事後学習の充実であった。しかし、これも十分に行なえているとはいえない。講師の方々からはできるだけ事前に資料を頂戴することになっている。多くの方が、資料を送付して下さっており、それは事前にプリントして生徒全員に配布している。また、著書も紹介している。しかし、それを以

て事前に指導することはほとんど行なっていない。たとえば、大江健三郎氏の場合のように、文学者をお呼びした場合、国語科の教官がその文学者を授業中に紹介し、その作品を学習させることはあった。しかし、他の多くの講師の場合、その講師や講師の仕事について本校教官が事前に指導することはかなり困難である。せいぜい、その講師についての知識をもっている教官が授業やホームルームを利用してふれる程度である。組織的な事前指導ができていないのが現状である。

事後指導も、それとほぼ同様である。ただ、毎年、その年度のものに関しては『特別合同授業の記録』という形で小冊子にまとめ、年度末に生徒全員に配布している。

今一つ、当初の計画には「テーマの設定」というものがあった。しかし、現在ではテーマは設定されていない。テーマに沿って講師をお招きすることが非常に困難であるからである。講師の選定は確かにバランスは考えているが偶然的要素によることが多い。たとえば、たまたま担当になったものが、何らかの知己があったとか、他の教官から紹介があったとか、あるいは中に入ってくれる人がいたとかである。もちろん、バランス上、どうしてもこんなジャンルの講師をと考え、直接依頼し、快諾していただける場合もある。しかし、これはいつも期待できるとはいえない。現在では、必ずしも「テーマ」を設定しなくてもよいと考えている。というのは、生徒に取ってみれば、三年間で12人の講師の話を聴けるからだ。そうすると、かなり多くのジャンルの話を満遍なく聴ける。かえってテーマを絞っていないほうが良いということも考えられる。

### (3)費用

現在、特別合同授業および文化教室（年に一度の観劇または音楽鑑賞）のために、文化教室費として父母から月々400円ずつ10ヵ月間徴収している。つまり、 $400円 \times 10ヵ月 \times 420人$ （生徒総数）＝168万円を徴収。うち、文化教室に約60万円支払っているので、残り約100万で特別合同授業を運営している。内訳は、年度末に発行する『特別合同授業の記録』に約30万円、講師謝金・旅費等に約70万円である。

### 3.特別合同授業に関する生徒の意識

特別合同授業に関して、現3年生および35回生（昭和58年度）以降の卒業生にアンケート調査を実施した。その目的は、生徒が、この企画にどういう意識と関心を持っているかを探るとともに、成果についても確かめ、さらには現状を反省できる資料を得ることである。

卒業生にアンケートを実施したのは、現役生だけでは成果と反省点を十分に確認できないのではないかと考えたからである。高校を卒業して、大学生あるいは社会人となって初めてわかることもあるであろうからだ。

卒業生に関しては、各期約30人～40人ずつ無作為抽出をし、郵送のうえ回答してもらった。250通郵送したのであるが、住所不明のため返送される場合も多くあり、卒業生の回答数は83通であった。ただし、それでもおおよその傾向は明らかになったと考える。

現役生は3年生だけを選んだのは、アンケート調査を実施した10月段階で、2年生は6回、1年生は2回受講したにすぎないからである。すでに、この段階で10回受講した3年生でなければ調査の意味がないと考えたからである。

#### アンケート回答数

卒業生 35回生～40回生は30名ずつ無作為抽出して、41回生・42回生は40名程度無作為抽出

して発送

回答数 83人

35回生（昭和58年度卒業生）7人 36回生（昭和59年度卒業生）6人

37回生（昭和60年度卒業生）7人 38回生（昭和61年度卒業生）8人

39回生（昭和62年度卒業生）7人 40回生（昭和63年度卒業生）11名

41回生（平成元年度卒業生）22名 42回生（平成2年度卒業生）15名

現3年生（44回生） 回答数 127人

### アンケート結果と考察

- (1) おもしろかったまたは、ためになった講師はどなたですか。別紙よりすべて選んでください。（卒業生・現3年生）

				[35回生]	
シルクロードの旅	平山郁夫（画家）	4人			
地質学と古生物学	森下晶（名古屋大学）				
魯迅と日本	尾崎秀樹（文芸評論家）			[36回生]	
日本人のこころ	笠原一男（東京大学）	1	3人		
自己表現としての短歌	近藤芳美（歌人）	1			
日仏美術の交流	マドレーヌ・ダヴィッド（ギメ美術館）	1			
一輪の花	安達瞳子（花芸安達流主宰）	1		[37回生]	
馬鹿になること	藤原正彦（お茶の水女子大学）	2	5	5人	
室生犀星・人と作品	新保千代子（石川近代文学館）	1	1		
中国が今、日本の青年に期待すること	王效賢（中華人民共和国参事官）	1			
壺中日月と花鳥風月	川口久雄（金沢大学）		1		
歴史の虚と実	浅香年木（石川工業高等専門学校）			[38回生]	
なぜ朝鮮問題に関心をもってきたか	安江良介（岩波書店）	1	2人		
文学との出会い	小川国夫（作家）		2		
進路と適性	浅井邦二（早稲田大学）	1	2	1	[39回生]
日本の住居と住居学	西村一朗（奈良女子大学）		1		2人
美術と文学	五十嵐ミドリ（金沢美術大学）			1	
物質の観察	本陣良平（金沢大学）	[40回生]	2	2	
国際化時代の日本人と日本企業	石田英夫（慶応大学）			1	1
漢詩・俳句・漢俳	朱実（上海国際問題研究所）				
私のシネマライフ	高野悦子（岩波ホール）	4人		9	1
物から知へ	翁長健治（広島大学）	2		[41回生]	1
国際協力とは	林義則（国際協力事業団）				1
英語・日本語・国際語	金谷憲（東京学芸大学）		7人		
文化を『つくる』こと	大江健三郎（作家）	9	14	[42回生]	3
『青と白の厳しさ』	八木原罔明（登山家）	3	4	3人	
知の越境者	上野千鶴子（平安女子短大）	9	11	3	
ハープは人生の小道具	池田千鶴子（ハーピスト）	3	8	6	
日本人の創造性について	鶴見和子（上智大学）	3	7	2	

対象喪失と悲哀の仕事	小此木啓吾（慶応大学）	11	8
私の私	秦恒平（作家）	4	6
生体の力と電気	深田栄一（筑波超材料研究所）	2	1
シェイクスピアと私	小田島雄志（東京大学） [44回生(現三年生)]	8	10
宇宙開発の現状と展望	伊東康之（宇宙開発事業団）	21	16.5%
私の経営信念	塚本幸一（ワコール会長）	43	33.9
宇宙には涯はあるか	小田稔（理化学研究所）	14	11.0
地球規模の環境問題	宮本憲一（大阪市立大学）	25	19.7
緑の星に生まれて	立松和平（作家）	60	47.2
豊かな話しことばを目指して	杉本泰夫(NHK日本語研修センター)	84	66.1
原子価	青野茂行（金沢大学）	1	0.7
複素数とフラクタル	宇敷重広（京都大学）	16	12.6
今イギリスから美術をみると	桜井武（英国大使館文化部）	26	20.4
ポスト冷戦時代の日本の安全保障	志方俊之(世界平和研究所)	114	89.8

#### [考察]

講師に対する生徒の意識には四つの特徴がある。

一つは、人生一般に関すること、あるいは生き方に関する講演が特に印象に残っているということである。その例は、藤原正彦氏、高野悦子氏、大江健三郎氏である。藤原氏は、数学者ではあるが、内容は、数学というよりも、一つのクリエイティブな仕事を成し遂げるためには物事に執着する「馬鹿になる」ことが必要であるということをお話された一種の人生論であった。高野悦子氏も、青年期の満州時代からの苦労話を述べられ、特に女性の生き方を訴えるものであった。大江健三郎氏も、文学論というよりは、正岡子規や柳田国男を紹介する中で、「大事なことは発願すること、そしてそれを成し遂げることだ」という青年の生き方を訴えるものであった。

これに対して、生徒がなかなかついていけなかったのは、講演の内容が専門的になった場合である。これが第二の特徴である。しかし、そのような場合でも、新しい学問の世界に目を開かせてもらった場合、強く印象に残ったようだ。これが、第三の特徴といえよう。従来の演繹あるいは帰納というような考え方でなく、まったく新しいポストモダンの考え方のお話を教えていただいた上野千鶴子氏や、「対象喪失と悲哀の仕事」という心理学のお話を頂戴した小此木啓吾氏などである。

そして、第四の特徴として、現在直面している問題について語ってもらった場合も生徒は興味を高めたということである。その一つが、立松和平氏である。氏は、パリーダカールラリーの経験のお話について環境問題とPKO問題について語られた。これに対して立松氏と反対の立場からPKOの必要性について客観的に語られたのが志方俊之氏であった。特に志方氏の場合、話し方がお上手なことも手伝って、3年生のほとんどがおもしろかったとしている。

(2) 特別合同授業について、在学中においてはどのように思っていましたか。下記より一つ選んでください。 [卒業生]

①いずれの講師についても楽しみにしていた。	9人	10.6%
②多くの講師について楽しみにしていた。	16	19.3
③興味のある講師については楽しみにしていた。	50	60.2

④通常の授業の方がよかった。（合同授業に興味なかった）	2	2.4
⑤その他 [ ]	6	7.2
事前に講師の説明がなかったので興味の持ちようがなかった。 講義の内容しだい、 在学中何も考えていなかった。 難しくよくわからなかった。 聴こうと思うが途中で退屈になった。 重要だとは思わなかった。		

(2) 特別合同授業についてどのように思っていますか。下記より一つ選んでください。

[44回生 現3年生]

①いずれの講師についても楽しみにしていた。	9人	7.1%
②多くの講師について楽しみにしていた。	21	16.5
③興味のある講師については楽しみにしていた。	86	67.7
④通常の授業の方がよかった。（合同授業に興味なかった）	4	3.1
⑤その他 [ ]	7	5.5
授業がつぶれてうれしい。授業よりまし。4人 話が楽しかったらきく。 聴いたあとおもしろいと思うものもある。 楽しみではないが聴くとおもしろい。		

[考察]

卒業生・現3年生ともに、最も多いのは③の「興味ある講師については楽しみにしていた。」で、②「多くの講師について楽しみにしていた。」がそれに続く。しかも、その割合は卒業生・現役生ともにほぼ同じである。

ひとりの生徒で3年間に約12名の講師の話を聴く。興味がある場合も興味のない場合もあるので、すべての講師を楽しみにするというのは不可能であろう。その意味で、①～③が9割以上いるというのは、生徒は合同授業を意味あるものと概ね考えていると判断してまず良いであろう。しかし、たとえ興味がなくても、話をうかがうことによって視野が開かれるかもしれない。また、話をうかがうことによって興味が生まれるかもしれない。興味あることのみを聴かせていたのでは公教育としてまずいと考える。その意味で、今後②と答える生徒が多くなるように、事前の指導あるいは宣伝に努めたい。

(3) 特別合同授業について、卒業して振り返ってみてどう思いますか。下記より一つ選んでください。[卒業生]

① 校外の講師を招いて講演を聴くことは、自分にとって おおいに意味のあるものであった。	37人	44.5%
② 校外の講師を招いて講演を聴くことは、興味のある講師 については意味のあるものであった。	36	43.4%
③ 校外の講師を招いて講演を聴くことは、自分にとって 意味がなかった。[通常の授業が展開されたほうがよ かった。]	3	3.6%
④ その他	7	8.4%



講師の当たり外れが大きかった。  
 事前に準備をしておくべきだった。  
 よくわからなかった。  
 しっかりと聴いておくべきだった。  
 非常によい企画だと思うが自分が未熟だった。  
 意味があったかどうか自分にはわからない。

(3)' 特別合同授業の意味をどう思いますか。 [44回生 現3年生]

- |  |     |       |
|--|-----|-------|
| ① 校外の講師を招いて講演を聴くことは、自分にとって<br>おおいに意味のあるものであった。               | 52人 | 40.9% |
| ② 校外の講師を招いて講演を聴くことは、興味のある講師については意味のあるものであった。                 | 69  | 54.3% |
| ③ 校外の講師を招いて講演を聴くことは、自分にとって<br>意味がなかった。 [通常の授業が展開されたほうがよかった。] | 2   | 1.6%  |
| ④ その他<br>通常の授業がつぶれる。<br>あまりに難しすぎる。 2人<br>今の先端がわかる。           | 4   | 3.1%  |

[考察]

この結果は意外であった。①という回答率が卒業生と現3年生とでもっと差がでると考えていたからである。卒業生の場合、大学生あるいは社会人として社会経験を積み、視野も広がるので、特別合同授業というものの意味を強く受けとめなおしているのではないかと、一方、現3年生は、まだ社会経験も浅く、この企画の意味を自己のものとできていないのではないかと考えていたのである。しかし、結果は現3年生の①の回答率と卒業生のそれとはほぼ同じであった。3年生になると、この企画の、自己の成長に対する意味がかなりわかっているものと捉えても良いであろう。

(4) 特別合同授業の人選についてどう思いますか。下記よりすべて選んでください。

	[卒業生]	[44回生現3年生]
① 適当であったと思う。	28人	60人
② もっと大物を呼ぶべきだ。	19	44
③ 現在最先端に行く中堅を呼ぶべきだ。	17	32
④ もっと身近な人を呼ぶべきだ。	15	9
⑤ もっと文科系の人を呼ぶべきだ。	6	13
⑥ もっと理科系の人を呼ぶべきだ。	4	
⑦ 学者より実社会で活躍をする人を呼ぶべきだ。	38	54
⑧ その他		

予算に左右されるようでは人選する側に問題がある

[考察]

講師に対する希望についての考察は(6)の所で行なう。

(5) 特別合同授業にあなたはどのように臨みましたか。[44回生 現3年生のみ]

①毎回熱心に聴講した。	7人	5.5%
②興味あるものは熱心に聴講した	104	81.3
③何となくボーと聴講していた。	15	11.7
④ほとんど聴いていなかった。	2	1.6
⑤その他	0	0

[考察]

もう少し③が多いかと予想していたが、②が圧倒的多数で安心した。さすがに、毎回熱心に聴講していたという①の生徒は少数であった。特別合同授業の内容はかなり高度である。したがって、すべての講義を熱心に聴けというのは無理かもしれない。その意味から考えて、②が圧倒的多数ということは、まずまずよく聴いているということになるであろう。ただ、これは3年生の調査である。知的発達・知識の量・視野の広さがまだ不十分な1年生では③がもっと多いのではないかと、推定する。

(6) その他、特別合同授業について、ご意見・ご感想がございましたら下記にご記入ください。  
(卒業生・現3年生)

回答された意見・感想を[1]合同授業に対する評価・[2]合同授業の講師について・[3]合同授業の方法についての三つに分類し、次に列挙してみた。文末の数字は、現3年生、卒業生をあわせて、同種の意見の数である。

[1] 合同授業に対する評価

- ①いろいろな世界を見ることができ、大変よいものだ。視野を広げる意味がある。(アカデミズム・生きた学問に触れる機会である。通常の授業・教科書とは違う話を聞いてよかった。) 15人
- ②他の学校にない良い企画だ 2
- ③高校という感受性豊かな時期に時代に聴けたことに意味がある(講師に、進路に対する考え方を左右された。下宿で先輩と夜もふけるまで合同授業について語り合った。) 2
- ④高校時代しっかり聴いておきたかった(今振り返ると有意義なことであった。) 3
- ⑤講演は講師のパワーが感じられて好きだ。
- ⑥卒業生も聴けるようにしてほしい(お金をだしても) 5
- ⑦将来、講師として呼ばれたい。 2
- ⑧講師の名前に興味がないと内容に興味を持てなかった。(講師の名前すら知らず、関心を持てなかった。) 2
- ⑨つまらないのにあたると二時間拷問のようなものだ。
- ⑩自分の人生の自慢話をする人がいるのが残念。 2

[考察]

(6)は全員に強制して回答してもらたわけでないので、プラスの評価をしてくれたものが多かったようである。①のように「視野が広がった」とか、生きた学問に触れることができたという感想が非常に多いということは、所期の目的の大事な部分はほぼ達成されているとみてよい

であろう。また、合同授業が本来の意味での進路指導になればと考えていたが、やはり、③のような感想を持ってきていた。さらには、⑦のような生徒・卒業生がいたことは大いに勇気づけられた。特別合同授業が「学ぶこと」へのエネルギーになったわけであるから。

しかし、マイナスの評価として⑧や⑨がある。⑧に関しては、そもそも高校生はよっぽどの有名人でないといくら偉大な業績を残している講師をお招きしても、その名を知らない。むしろ、合同授業の場で初めて名を知ればよいと考える。また、卒業しても、あんな偉大な人の話を聞いたことがあるのだということを知る卒業生もいる。高校教育をその場限りの教育と考えず、生涯学習の一環と考えれば、それでも十分に教育効果があったことになるであろう。ただ、「講師の名前を知らない」ということで耳と心と頭を閉ざしてしまわないような工夫が必要であると、担当者としては考える。

また、⑨に関してであるが、つまらないかおもしろいかは生徒が自分で勝手に判断してしまっている。合同授業の講師はいずれも現在活躍中の一流の人物である。内容がないわけがない。それを勝手につまらないというように感じさせているのは、生徒の器量を狭くしている我々の日頃の授業にも問題があるのではないかと考える。特別合同授業の当初のねらいや目的を達成するためには、日頃の授業の在り方も考えなければならない。

## [ 2 ] 合同授業の講師について

- ①専門的な内容より人生観あふれる話、話題になっていることについての話を聴きたい。（視野の広がるような人、実社会で活躍している人を呼んでほしい。理系の人の話を聴きたいが、理系の人は学者っぽく理解しにくい。）25人
- ②ジャンルに関してバランスよく聴けたらよい。（女性も呼んでほしい。2 スポーツや芸術関係の講演が聴いてみたかった。4 作家の人を呼んでほしい2 医学系の人を呼んでほしい。歴史学者を呼んでほしかった。）14
- ③将来の進路を考えさせるようなものがよい。 3
- ④外国人の講演も聴いてみたい。
- ⑤有名人を呼んでほしい。（有名人にあったというだけで貴重な体験になる）2
- ⑥野性味のある人を呼んでほしい。 2
- ⑦国際的視野を広げてくれる人がよい。
- ⑧後々まで生徒に考えさせるような講演がよい。
- ⑨難しい話をわかりやすく話してくれる講師がよかった。（話の上手な人）2
- ⑩呼びたい講師をアンケート調査してほしい。6

## [ 考察 ]

アンケート調査(4)とあわせて考えると、さまざまなジャンルであるとともにさまざまなタイプの講師を呼ぶべきであるときことが明らかになった。大物を呼んでほしいという意見がもう少し多いと予想していたが、調査の結果必ずしもそうではなかった。現3年生の場合は、たしかに大物を呼ぶべきだという意見が多かったが、それでも、最先端に行く中堅を呼ぶべきだという意見もかなりあった。それに対して、卒業生の場合、大物・中堅・身近な人という回答がほぼ同数ずつあった。視野の拡大や、本来の進路指導というねらいを果たすためには、ジャンルもタイプもバラエティーに富んでいるほうがよいということが、現3年生、卒業生の意見からでも再確認できたといえよう。

アンケート調査(4)でもまた(6)の意見・感想でも特に多かったのは、学者よりも実社会で活躍

する人を呼ぶべきだという意見である。専門的な内容もさることながら、むしろ一流の人物の人生論を聴きたいという意見である。特別合同授業は、大学教育と高校教育の橋渡しという意味もこめて、基本的には大学の先生をお招きするということであつたが、先述のように実際には実社会で活躍している方も多く講師としてお招きし、生徒の好評も得ている。進路指導ということ「大学進学」という狭い視野のみで考えるのではなく、将来社会人としてどのように人生を送るかということを考えさせることだと考えた場合、社会人の講演をうかがうことは、生徒にとっても大きな刺激になるのではないかと考える。

今一つ、担当者が反省しなければいけない点は⑩の意見である。生徒にとっては自己とまったく別の所で講師が決まり、その講演を聴かなければならないという形が現状である。確かに、生徒が講師を適切に選べるか、また生徒が推薦した講師を実際に呼べるかは問題である。しかし、一度生徒に希望をとってみることも必要ではないかと考える。そうすることによって、生徒自らも参加した企画になるからである。単純な講師推薦が不可能としても、担当者がお招きできそうな講師を列挙し、その中から生徒に希望調査するという形なら可能であろう。

### [ 3 ] 合同授業の方法について

- ①事前指導があるべきだ。聴く側が予備知識を持っておくべきである。（事前に講師の情報を流してほしい。講義内容の資料を作成してほしい。） 10人
- ②生徒に対する意義付けが必要だ。聴き方を指導すべきだ。（一年生にはまず身近な講師で意識喚起すべき） 5
- ③質問の時間をもう少し長くする。 4
- ④質問の時間はなくてもよい。
- ⑤講師と直接触れる機会がほしい。（講師とディスカッションしたかった。） 2
- ⑥複数講師による討論形式もおもしろいのではないか。
- ⑦講演が冊子として残るのが良い。
- ⑧スライドなどが使われるとわかりやすい。
- ⑨一回の時間をもう少し長くしたほうがよい。
- ⑩一回の時間をもう少し短くしたほうがよい。
- ⑪回数を増やしてもよいのではないか。
- ⑫途中退場も認めてほしい。
- ⑬自由参加にしてこじんまりとしてはどうか。 3
- ⑭毎週実施してほしい。
- ⑮クラブの公式戦があるときにはさけてほしい。
- ⑯講演を聴く環境を整えてほしい（講堂の整備 OHP・スライドを見やすく） 4

### [ 考察 ]

この意見・感想から三点の反省点が明らかになったと考える。

第一点は、事前指導の点である。現状は前述したが、生徒の動機づけのためにもやはり、もう少し改善していく必要があるであろう。これに関しては担当者だけではどうにもならない点がある。各教科・科目の教官との連携が必要であろう。講師の専門と関連ある教官によって授業中に事前指導していただくような体制を、今後もう少し整えていかなければいけないであろう。あるいは、その教官から情報をもらった担任がショートホームの時間に事前の宣伝をするというような形も考えていきたい。

第二点は、時間配分の問題である。現状の講演約90分、質問時間約10分という配分では質問時間が必ずしも十分ではない。これに関しては講演の時間を80分にして、質問時間を20分に増加し、質問時間を確保したほうが、生徒の自主的学習のためには有効ではないかと考える。また、講師と直接触れる機会が欲しいという意見もある。これは、その講師や講師の講演に興味を持った生徒にとっては重要な教育機会である。この点に関しても、もし講師に時間の余裕があれば、その時間も確保できるようにお願いしていきたいと考える。

第三点は、聴講態度の指導である。特に、特別合同授業の意義づけをすべきであるという意見があった。確かにその通りである。一つは中学校段階の学習とは形態がまったく異なるからである。また、オリエンテーションで聴く態度を養ったり、その意義を認識させることも重要である。その意味で、年度第一回目の特別合同授業の冒頭に毎年この点に関して指導していきたい。

その他、講演を聴く環境の整備も指摘された。確かに重要な点で要求していかないとはいけませんが、経費の問題もありこの点に関してはかなり困難である。

#### 4. おわりに

特別合同授業は、現在の教育環境のなかではますますその重要性を高めている。アンケート調査の結果、当初考えていたねらいはある程度果たすことができたということが確認できた。また、反省点も明らかになった。今後、可能なかぎり改善していきたい。

このような企画はどここの学校でも同様な形で実施できるとはいえないかもしれない。たとえば、本校は3クラス・3学年の全校生徒420名だから一同に会して実施することができる。しかし、学年単位であれば同種の企画も可能ではないだろうか。また、講師の選び方に関しても、各校で適宜判断すれば、それぞれの学校でも意味ある教育活動になるのではなかろうか。教育内容の改善とともに教育方法の改善が叫ばれている今、本報告が、他校にもなんらかの参考になれば幸いかと思う。





45	文 学 (57. 9.20)	自己表現としての短歌	歌 人	近 藤 芳 美 氏	10
46	美 術 (57.10.25)	日仏美術の交流	ギメ美術館顧問	マドレーヌ・タヴィット氏	10
47	花 道 (57.11. 9)	一輪の花	花芸安達流主宰	安 達 瞳 子 氏	10
48	数 学 (58. 5.12)	馬鹿になること	お茶の水女子大学	藤 原 正 彦 氏	11
49	文 学 (58. 7.15)	室生犀星・人と作品	近代文学館館長	新 保 千 代 子 氏	11
50	政 文 治 化 (58. 9.26)	中国か今、日本の青年に期待するもの	中華人民共和国参事官 駐日本国大使館	王 效 賢 氏	11
51	文 学 (58.11.17)	壺中日月と花鳥風月	金沢大学名誉教授	川 口 久 雄 氏	11
52	歴 史 (59. 6. 6)	歴史の虚と実	石川工業高等専門学校教授	浅 香 年 木 氏	12
53	政 治 (59. 9.17)	なぜ朝鮮問題に関心をもってきたか	「世界」編集長	安 江 良 介 氏	12
54	文 学 (59. 9.28)	文学との出会い	作 家	小 川 国 夫 氏	12
55	心 理 学 (59.11. 8)	進路と適性	早稲田大学教授	浅 井 邦 二 氏	12
56	建 築 学 (60. 7.18)	日本の住居と住居学ー将来への課題	奈良女子大学助教	西 村 一 朗 氏	13
57	美 術 (60. 9.19)	美術と文学	金沢大学非常勤講師	五十嵐 ミドリ 氏	13
58	医 学 (60.10.16)	物質の観察	金沢大学長	本 陣 良 平 氏	13
59	経 済 (61. 7.12)	国際化時代の日本人と日本企業	慶応義塾大学教授	石 田 英 夫 氏	14
60	文 学 (61. 9.27)	漢詩、俳句、漢俳	上海国際問題研究所所長	朱 実 氏	14
61	文 化 (61.10.24)	私のシネマライフ	岩波ホール総支配人	高 野 悦 子 氏	14
62	工 学 (61.11.15)	物から知へー新しい工学	広島大学教授	翁 長 健 治 氏	14
63	国 際 関 係 (62. 5.13)	国際協力とは	国際協力事業団	林 義 則 氏	15
64	教 育 学 (62. 9. 8)	英語・日本語・国際語ー国際コミュニケーション入門ー	東京学芸大学助教授	金 谷 憲 氏	15
65	文 学 (62.10.26)	文化を『つくる』こと	作 家	大 江 健 三 郎 氏	15
66	登 山 (63. 5.11)	『青と白の厳しき』ーヒマヤラ登攀の印象ー	登山家	八木原 圀 明 氏	16
67	女 性 学 (63. 6.18)	知の越境者ーポストモダンの学問論のためにー	平安女子短期大学助教授	上 野 千 鶴 子 氏	
68	音 楽 (63. 9.14)	ハーブは人生の小道具ー視野広く心広く夢を追い求めてー	ハーピスト	池 田 千 鶴 子 氏	16
69	社 会 学 (63.10. 5)	日本人の創造性についてー南方熊楠の仕事ー	上智大学教授	鶴 見 和 子 氏	16
	平 成				
70	医 学 ( 1. 6.13)	対象喪失と悲哀の仕事	慶応義塾大学助教授	小此木 啓 吾 氏	17
71	文 学 ( 1. 7.11)	私の私	作 家	秦 恒 平 氏	17
72	物 理 学 ( 1.10. 5)	生体の力と電気	筑波超材料研究所	深 田 栄 一 氏	17
73	文 学 ( 1.11.29)	シェイクスピアと私	東京大学教授	小田島 雄 志 氏	17
74	宇 宙 工 学 ( 2. 6.18)	宇宙開発の現状と展望	宇宙開発事業団	伊 東 康 之 氏	18
75	経 済 ( 2. 9.26)	私の経営信念	株式会社ワコール会長	塚 本 幸 一 氏	18
76	宇 宙 物 理 学 ( 2.11. 9)	宇宙に涯はあるか	理化学研究所理事長	小 田 稔 氏	18
77	環 境 問 題 ( 2.11.19)	地球規模の環境問題	大阪市立大学教授	宮 本 憲 一 氏	18
78	文 学 ( 3. 4.11)	緑の星に生まれて	作 家	立 松 和 平 氏	19
79	文 化 ( 3. 6.14)	豊かな話しことはを目指して	NHKアナウンサー(6回卒)	杉 本 泰 夫 氏	19
80	化 学 ( 3. 9.12)	原子価	金沢大学長	青 野 茂 行 氏	19
81	数 学 ( 3.11.16)	複素数とフラクタル	京都大学助教授	宇 敷 重 広 氏	19

数字は講演記録所収号数